
まりさんぽ

ルシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まりさんぽ

【Nコード】

N9503S

【作者名】

ルシフェル

【あらすじ】

ここは幻想郷

暇を持てあましている魔理沙

その彼女がどこかに出かけるようです

はてさてどんなできごとが起きるのやら…

（前書き）

はい3作目です
今回は東方です
イメージは平和な日常の1コマ、つまりほのぼのですね
ではどうぞ

百合っぽいものがあります
嫌な方はUターンをお勧めします

「暇だぜ…」

と木の上で霧雨きりさめ魔理沙まりさがくつろいでいた。

時間は遅めの朝、天気は晴れ。

こんな良い天気だが特に何もやることないく、魔理沙は木の上で休んでいた。

「色んなところを回ってみるか…」

暇だから色んな所に遊びに回ってみることになったみたいだ。

アリス・マーガトロイドの家

「で私の家に来たのね？」

「まあそういうことだぜ。」

魔理沙は始めにアリスの家に来た。
今はアリスが出してくれた紅茶を飲んでる。

「私の家に来ても何もやることないわよ。」

「そうだな…あつ、そーいやアリスの作ってる人形あるだろ？」

「ええ、あるわよ。それがどうかしたの？」

魔理沙は何か思い出したようにアリスに質問する。
それにどうかしたのかと質問で返す。

「あれって、自分で操ってるって言うてたけど、絶対嘘だろ。」

「そんなことはないわよ。前にも言ったけどあれは全部ではないけど操ってるの、半自律人形^{セミオートマトン}。」

アリスの魔法に疑問を持つ魔理沙は、信じないとばかりに断言する。
アリスはそれに反論する。

「じゃあ、私にもやらせてみるよ。」

「いいけど…無理だと思うわよ？」

「大丈夫だって。」

魔理沙は自分で証明してみるとアリスに頼む。
アリスはやってもいいが上手く動かせないだろうと言うが、魔理沙は手をプラプラさせて平気だと言った。

それを見たアリスは仕方ないと椅子から立ち上がり、棚の上から一人形の人形を持ってきた。

「どうぞやってみなさい。たぶん無理だと思うけど。」

「そんなことやってみないとわからないぜ。」

人形を机に置いたアリスは再び無理だろうと言うが、魔理沙はそれを無視してやってみた。

「…！ッ！」

「やっぱり上手くできないわね。」

魔理沙は手を動かして上手くできない。手でできないからか魔理沙は体まで動かして必死にしていた。

アリスはそれを見て少し、何か含みのある笑みを浮かべながら魔理沙に言う。

「んゝやっぱり自律人形じゃないのか？」

「だから違うわよ。貸してみなさい。」

アリスは魔理沙の手から自分の人形を返してもらつと器用に動かす。人形からは剣が出ており、時々命令を出して剣舞を上手にしていた。

それを見て魔理沙は感心していた。

「やっぱり凄いな、アリスは。」

「そ、そうでもないわよ／＼」

魔理沙はアリスの見事な人形使いに純粋な感想を述べるが、それにアリスは照れてしまい顔が少し赤くなっていた。

「よしもう一回やらしてくれ！」

「何度でもいいけど…」

魔理沙は意気込むと、アリスの手にあった人形をパッと取ってしまった。それもアリスの言ってる途中で。よほど上手になりたいのである。

アリスは机の上に頬杖をついて魔理沙の様子をしばらく見ていたが、さっきよりもほんの少しだが魔理沙は上手になっていた。

「結構上達早いわね。」

「そうなのか？」

「ええ、私もそこまで早くなかったわ。」

アリスがそういうと魔理沙はそっかと短く呟くように言うが、魔理沙の顔は笑顔になっていた。

それから魔理沙はまた人形を上手く動かす練習を始めていた。

「そうそう練習してるところ悪いんだけどそれにあまり魔力込めないでね。それ多くの魔力込めたら爆発するやつだから。」

「え？なんか言ったか？」

アリスが途中で思い出したように魔理沙に忠告するが、魔理沙は集中していたのでよく聞こえなかったようだ。

さらにその瞬間、魔理沙は思わず力んでしまい魔力を多めに入れてしまった。

するともちろん……

ドオオオン！！

魔理沙が持っていた人形は爆発してしまい、部屋全体がごちゃごちゃになる。魔理沙やアリスはギャグ漫画みたく煤によって黒くなっていた。

「……魔理沙？」

アリスの顔は笑っているが額には怒りマークをつけていた。背後に般若のようなものが見えるアリスに魔理沙は冷や汗を流す。

「えっと……ごめんだぜー！！！」

「魔理沙ああー！！！」

魔理沙は最後に謝っていったが手伝おうとはせず早々にアリスの家を去っていった。アリスも最後に叫んでいたが無常にもそこら一帯に声を通るだけで、今日は魔理沙が戻ってくることはなかった。

博麗神社

「あゝ大変だったぜ。」

「いや、アリスの方が大変だと思うわよ。」

時間は昼を回った頃。

さつき酷い目にあった魔理沙は今度は博麗^{はくれい}霊夢^{れいむ}のいる博麗神社に來ていた。

魔理沙の呟きに霊夢はツツコミながらお茶をすすっていた。

「そんなこといったって、あれは事故だぜ。」

「まあそうかもしれないけど、片付けもしないでこっちに來たわけですよ。」

「じゃあ霊夢も手伝ってくれるのか。」

魔理沙は霊夢に言い訳をするが、霊夢もまともなことを言っているので反論が上手くできない。

しかしそれならば手伝ってくれるのかと目をキラキラさせて霊夢に頼む。

「それは嫌よ。めんどくさいもの。」

だが霊夢はそれをきっぱりと断ってしまふ。理由はただめんどくさいからというもの。

それには魔理沙は一瞬しかめっ面をするが、何を言っても無駄だとわかったているため諦めてすぐに前の景色を見る。

「で私のところに来てどうするの？アリスの家みたいに爆発だけは止めてね。」

「わかってるよ。そうだな…。」

（暇つぶしのために）考え込む魔理沙。少し考えると何を思ったのか突如こんなことを言い出す。

「そうだ。服を交換しようぜ。」

「は？」

魔理沙の提案に案の定霊夢は意味がわからないと声をあげてしまふ。

「いつもその腋の開いた巫女服ばかりじゃつまらないだろ？」

「つまらないとかの問題じゃないと思うんだけど…。魔理沙は交換しても別にかまわないの？」

「ん？別にかまわないぜ。」

霊夢は魔理沙の提案に自分はいいいのかと聞くが、魔理沙はあっさり

と承諾して切り捨てる。

霊夢はそれを聞き、腕を服の前に当てて拒否の意思を示した。

とそこに…

「あら、なんか面白そうね。」

いきなりどこからか声がした。

しかし霊夢や魔理沙も驚くことなく平然としていた。
なぜならそこに現れたのは八雲 紫だったからだ。

「……またこういう時に現れるのね。」

「面白そうだったからね。」

霊夢は面白いからという理由で呆れている。そしてそれと同時に、
味方してくれるという1%の期待と魔理沙の方に加勢されるという
99%の不安が渦巻いていた。

「ということでは着替えましょ。」

「ということじゃなくて私嫌なんだけど…」

「「問答無用!」」

「えっ! ちょ…きゃあああ!!!!」

霊夢は必死に抵抗するも二人の前には意味もなく、無常にも霊夢の
声が境内に響き渡るだけだった。

そして3分後

「うう／＼／」

「けっこう恥ずかしいぜ、これ／＼」

「あらなかなか似合ってるわよ、お二人さん。」

着替え終わった二人は凄く恥ずかしがっていた。
それに紫が嘘か本当かわからないお世辞を言う。

ちなみに二人の服は今さっきまで着ていた服ではなく、代えの服である。

霊夢はさすがにそれは嫌だと言って断固拒否したためだ。
着替えたためそれぞれの服は端にきれいにたたんで置いていた。

「てか服を交換したいって言うていた本人が恥ずかしがってどうするのよ。」

「まさかこうも恥ずかしい服装だとは思わなくて…」

「それって年中恥ずかしい服を着てるってこと!?!」

自分で言っておいて恥ずかしがる魔理沙。

それにツツコミを霊夢に入れるが、逆に自分がダメージを受けてしまった。

そしてもう一人、なぜか気持ち悪くもじもじしている人がいた。

「なんて可愛いのかしら。」

「えっと…なぜそう八雲　紫さんはそうもじもじしているのかしら？」

紫の状態を見た霊夢は思わずフルネーム&敬語で尋ねてしまう。
魔理沙もそれに気づいたため、霊夢の少し後ろに下がる。

「霊夢……！」

「きゃあああ……！」

予感的中し、紫はいきなりに飛び掛っていき霊夢に抱きついてきた。

そのため霊夢の二度目の絶叫が響きわたると同時に畳に倒れてしまう。

悲鳴をあげるが紫は気にした風もなく思いっきり抱きついてすりすりしている。

「見てないで、魔理沙も助けなさないよ……って。」

霊夢は魔理沙に助けを請おうとして振り向くがそこには誰も居なかった。

誰もいないとわかった霊夢は怒りと同時に絶望した。

抱きつく紫と抱きつかれる霊夢。

二人の時間は夕方ごろまで続くのであった…

「……………まあ気にしたら負けだよな。」

霊夢が助けを求めていたころにはすでに外に出ていた魔理沙はすでにいつもの服装に戻っていた。

そして簾にまたがって飛んでいる彼女の呟きは静かに空に消えていくのであった。

香霖堂
かうりんどう

「…てあつたんだぜ。」

「そうか。」

現在香霖堂いる魔理沙はこの店の主、もりちかりんのすけ森近霖之助通称香霖に少し嬉しそうに今日の出来事を話していた。
椅子に腰を掛けている香霖も嬉しそうに話している魔理沙の言うことに相槌を打っている。

「本当に…楽し…かったぜ…」

しばらくすると魔理沙は今日の出来事で疲れたのかはたまた話をし
てすつきりしたのか机の上で寝てしまった。

それに気づいた香霖は立ち上がり奥の方に消えていった。
しばらくして帰ってきた香霖の手には毛布を持っていた。その毛布
を魔理沙にそつと優しく掛ける。
掛けた香霖の顔は親のような慈愛に満ちていた。

そして最後に香霖は魔理沙に起きない程度の声でこう呟くのであつ
た。

「
お
や
す
み
」

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

まあ途中のゆかれいむは僕の暴走ですねwww

あと服なんですけど…違う服だとななるのかなあって思ってた
なっ たわけですね、はい

そういえば最後変な終わり方になった気がする…
あとキャラ上手く書けてるか心配…

まあ感想・評価・誤字等お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9503s/>

まりさんぽ

2011年10月8日04時55分発行